



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## 島崎藤村「初恋」の教材的価値

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): Shimazaki Toson, The First Love, value of teaching materials 作成者: 陳, 知清 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/00173515">http://hdl.handle.net/2309/00173515</a>

# 島崎藤村「初恋」の教材的価値

陳 知 清\*

## はじめに

藤村作品が初めて教科書に採録されたのは1902（明治35）年の「中学帝国読本 全十冊」（武島又次郎編、金港堂）に載った「二つの声」（『若菜集』より）である。それ以来、藤村作品は100余年にわたり国語教材として大きな位置を占めてきた。特に大正・昭和時代（戦前）の旧制中等学校読本に、藤村詩をはじめ藤村の感想文や童話、小説などが多く使われていた<sup>1</sup>。戦後、新制中学・高校<sup>2</sup>の国語教科書においても藤村作品が多用された時期がある<sup>3</sup>。

1947（昭和22）年から教科書検定制が復活し、教科書の発行会社が多くなり、国語教科書の種類も多様になった。50年代<sup>4</sup>の国語教科書に採録されている藤村作品は、詩（「千曲川旅情の歌」「潮音」等）、エッセイ（「大きなことばと小さなことば」「初学者のために」等）、紀行文（「海へ」「パリだより」等）、小説（「夜明け前」「嵐」「家」等）など多岐にわたり、採録回数も多い時期であった。しかし、60年代以降<sup>5</sup>、中学・高校の教科書に採録された藤村作品は徐々に減少していった<sup>6</sup>。80年代から中学では「初恋」、高校では「小諸なる古城のほitori」<sup>7</sup>が定番化していく。そして、前者は2020年度使用開始の中学三年生用の全ての国語教科書（四つの発行社からそれぞれ一冊出ている）に採録されるようになった。

「初恋」についての教材研究は1960年代からすでに始まったが、研究や授業実践記録が多く出されたのは80年代以降といえる。以下重要だと思われるものを紹介する。関良一は「島崎藤村『初恋』・『千曲川旅情の歌』（大河原忠蔵ら編『国語教材研究講座 高等学校「現代国語」第2巻、有精堂、1967年9月）で、「初恋」

の教材としての価値について、「第一には、「たけくらべ」などと同じく少年少女の体験・心情をうたったものとして、生徒に理解され、共感されやすい点であろう。第二には、前述のような性質を内包した詩であるにせよ、やはり一応は清純な、ロマンティックな印象を与える点だろう。第三には、文語詩ではあるが表現が比較的平易な点も指摘されよう。」とまとめた。

小室善弘は「初恋」（吉田熙生編『詩の読解指導』東京書籍、1980年4月）で、この詩の特色を分析したあと、文語定型詩のリズムや主題、時代背景などの面から指導の狙いを述べた。深沢忠孝は「島崎藤村「初恋」（『講座中学校国語科教育の理論と実践 第5巻』有精堂、1981年2月）で、この詩の指導目標として、文語定型詩の鑑賞の仕方を学ぶこと、近代詩の流れと島崎藤村の位置について学ぶこと、及び自己の体験や感動の表現を工夫することの三つを取り上げた。黒田正明は「「初恋」—初恋のイメージを表す語句に着目して」（甲斐陸朗編『語句に着目した読み方指導』明治図書、1991年3月）で、重要語句に着目した指導を構想した。大河原忠蔵は「国語教育の観点から見た「初恋」「千曲川旅情の歌」（『島崎藤村研究』23号、双文社、1995年9月）で、「初恋」を教えるとき、この詩が虚構であることと、第二連の「やさしく白き手をのべて」の詩句を積極的に評価することを問題にしなければならない二つのポイントだと述べている。

以上の概観からわかるように、教材としての「初恋」は様々な観点から研究されてきたが、しかし、各時期の教科書及び指導書を分析して教材的価値を考察することまではしていなかった。「初恋」は教材として長く使われてきたが、その教材的価値についての分析には

\* ちん ちせい 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究所  
キーワード：島崎藤村／「初恋」／教材的価値

なお考察すべき点が数多く残されているといえる。そこで、本研究ではこれらの先行研究を踏まえ、「初恋」の採録された教科書及び指導書を分析して、この詩の教材的価値を検討してみたいと考える。

## 一、「初恋」について

「初恋」は藤村が『文学界』46号(1896年10月)に発表した詩である。初出は「一葉舟」という総題の下、「四つ袖」「逃げ水」などととも「こひぐさ」の小題で括られていた。後に『若葉集』(1897年8月)に収録したとき、独立した詩として収められた。

4連16行からなるこの詩は、「われ」と「君」との恋の進展を「二人の出会い」、「恋の芽生え」、「恋の高まり」、「恋の成就」という起承転結の構成で描いている。第一連では、ようやく前髪を上げたばかりの少女と「われ」との林檎畠での出会いを描く。ういういしい少女が挿している花櫛と、その頭上に咲く林檎の可憐な花の姿と重なり合って、清純なイメージを形成する。第二連では、少女が林檎を渡してくれることをきっかけに「われ」は恋の芽えを意識し始める。第三連に入ると、詩情が急転して二人の恋が高まっていくことになる。思い余って包みきれずに打ち明けた恋心を彼女が受け入れてくれたので、「われ」は恋に酔いしれる。第四連では、最初の出会ってから相当の時間が経過し、二人の間にも第三連の息苦しさから多少のゆとりが生じてきている。いつの間にか二人が通ったことで林檎の樹の下にできた細道を指して、誰が通いそめた記念なのでしょう、と彼女に問われ、「われ」は一層のいとしさを感じる。

この詩は破調のない七五調で書かれており、流麗なリズムを形成している。五七調あるいは七五調というものは、調子のいいとともにともすると単調に陥りがちであるが、しかしこの詩を読む者は誰でもその韻律の美しさに気づくだろう。この韻律上の特徴はどこから来たのだろうか。島村輝はその理由をこの詩の「音楽的」な言葉使いに求めている。島村は第一連を例に取り上げて、その母音と子音のリズミカルな使用、及び「頭韻」「脚韻」の効果的使用を分析した。後者について氏は、「第一連全体としては、*ma da - ma e/ri n - mi e/ma e - ha na/ha na - o mo* という響きにみられる「頭

韻」的な効果、*no ki/ no ri* と踏まれた「脚韻」的な効果など、その音としての響きの特徴は枚挙に暇がない。<sup>8</sup>と述べている。この詩が広く読まれてきた理由の一つにこの「音楽性」があるといえよう。「初恋」が歌曲にもなっていることはその証拠の一つといえるだろう。

また、同語の反復もこの詩の特徴の一つである。例えば、「そめし」は第一連、第二連そして第四連に使われ、三回登場する。これに第二連の「はじめ」と題名の「初」を合わせると、同義語が五回反復されることになる。これによって「初恋」の初々しさが強調されているのである。と同時に、それぞれの連に使用された「そめし」はこの詩のリズムの形成にも役立っていると思われる。

同語の反復のもう一つの例は「林檎」である。類似表現の「薄紅の秋の実」を含めて四回出ている。「林檎」はこの詩の中で重要な役割を果たしている。吉田精一は、「林檎」は藤村の初期の詩によく使われた葡萄と同じく『旧約聖書』の雅歌から来ていて、愛の象徴として使われていると指摘している<sup>9</sup>。ミッションスクール(明治学院)に通っていた藤村にとって、このような象徴的な意味を持たせるのはもちろんありうるだろう。しかし、それだけではないだろう。「林檎」といえば、『旧約聖書』創世記に記された、禁断の知恵の樹の実がまず思い出されるであろう。関良一が既に指摘したように、藤村の「文学界」時代の劇詩「草枕」(『文学界』13号、1894年1月)には「禁制の樹のかげに覚め」「目にはうつくしい林檎を見れば、口には其を食ひたいとは思はぬか」などの句がすでに見えている<sup>10</sup>。「初恋」の中で「林檎」は性のめざめを暗示するものとして使われているとも考えられよう。三好行雄が分析したように、第二連に出てくる「薄紅の秋の実」は、「幼さに通じる未熟、未発のイメージと同時に、性のめざめのうちにひそむ官能のおののきをすでに秘めたものとして提示されている」<sup>11</sup>。「林檎」の意味をこのように捉えれば、第三連の官能への傾斜は「初恋より少し成長した感がある」<sup>12</sup>と考えるよりむしろ自然的な展開といえよう。

先にも述べたように、この詩は初出時、「こひぐさ」の小題のもとに「四つの袖」「逃げ水」などと一括されている。「こひぐさ」には、恋の諸相を様々に描き分け

た詩が九篇集まっている。特にその中の「四つの袖」はお夏清十郎の濃艶な道行きをうたい、詩中の「をとこの氣息のやはらかき／お夏の髪にかかるとき」から分かるように、官能的なイメージが強い詩とされる。「初恋」の第三連の「わがこころなきためいきの／その髪のかかるとき」が、「四つの袖」への連想を促すことは想像に難くないであろう。

こうしてみると、藤村は『若菜集』の中で「恋愛」の持つ精神性だけでなく、そのエロスの側面をも肯定的に捉えているようだ。その点では、恋愛観に関しては、藤村は彼に大きな影響を与えたとされる北村透谷と大きな違いを見せているのである。1892（明治25）年2月『女学雑誌』に発表された透谷の「厭世詩家と女性」が当時の若い知識人に与えた鮮烈な印象については、数多くの証言がある<sup>13</sup>。「恋愛」に関して、透谷が情欲を基とする「粹」を批判し、新しい人間関係の根基となる恋愛を高唱したことは、旧倫理の否定・新しい思想の提唱という点で大きな意味があった<sup>14</sup>。しかし、透谷の恋愛論は、「粹」が基礎とした肉欲（獣欲）を徹底して批判し、恋愛の霊性を極端に強調するあまり、エロスの側面を完全にそぎ落とし、頭部から下は全く無視するという精神性の重視に偏っていた<sup>15</sup>。藤村は透谷から大きな影響を受けながら、彼と違う恋愛観を持ち、『若菜集』の中で情熱的な恋愛の情や官能を歌い上げた。

「初恋」が新潮社版の藤村文庫第三篇『早春』（1936年4月）に収録される際、藤村は第三連を削除した。そう考えれば、この改訂はこの詩の奥行きを損なわせることではなかったか。関良一が指摘しているように、「一般に『若菜集』の詩はそうであるが、この「初恋」も官能の解放、少なくとも肯定、いわゆる「春のめざめ」をうたっているところに特色があるので、第三節を削除してしまうと、「林檎」に官能のめざめを託するというこの詩の本来の趣意が十分に発揮されない嫌いがある」<sup>16</sup>とも考えられるからである。

以上分析してきたように、「初恋」は初々しい恋愛感情を流麗な七五調にのせて率直に歌い上げたところに大きな特徴がある。そのことは、この詩を同時代の他の恋愛詩と比較すれば抒情の水準が高いということからもわかるだろう。『若菜集』にやや先立って刊行され

た詩集『抒情詩』（1897年4月）の中にも恋愛詩が多く収録されているが、そのほとんどはまだ没個性的なものにとどまっているといえる。例えば、この詩集の田山花袋の「わが影」の冒頭の商品「山かげ」を見てみると、そこには恋への憧憬しか見られず、詩人の心象風景が乏しい。それに比べ「初恋」は人生に密着し、詩人の個性が強く出ていて、抒情の質がはるかに高いと言わざるを得ない。

では、この「初恋」は日本近代詩史においてどのような位置にあるのであろうか。それを述べる前にまず『若菜集』の文学史的位置づけについてふれなければならない。維新後、明治という新しい時代の思想や感情を表現するために、伝統的な詩形と違う新しい詩形が求められた。その最初の試みが『新体詩抄』（1882年7月）であった。それによって近代詩の夜明けが始まった。しかし、この詩集に収録された詩歌は、その詩形が短歌・俳句などの伝統詩と異なるだけで、作品としては未熟なものであった。その後、森鷗外等による訳詩集『於母影』（1889年8月）により、西洋の芸術的香気と詩想を清新流麗な日本語に移すことに成功し、のちの近代詩に大きな影響を与えた。特に透谷や藤村ら雑誌『文学界』に集まるような若き文学者に多大な感化を与えたことはよく知られている<sup>17</sup>。だが、この詩集は訳詩であって、創作詩ではなかった。

『於母影』に先立つこと四ヶ月前の1889（明治22）年4月、透谷は劇詩『楚囚之詩』を自費刊行した。これによって詩をそれまでの新体詩のように没個性的なものから、自己の心象風景の表現へと引っ張っていった。この詩集は、はじめて実質的な近代詩の内容を作り出したものだといえる。しかし、この試みがあまりにも時代を超えていたため、透谷は自信を失って自ら破棄した。続いて彼は1891（明治24）年5月、長編劇詩『蓬莱曲』を刊行した。この詩集は全体としては未成熟の形を脱し得なかったが、その個々の詩句の中には、苦悩する魂の表現において人間性の深い真実とその価値を強烈に示すことに成功した<sup>18</sup>。その後、透谷は評論に活動の主力を注ぐようになり、劇詩は書き続けなかった。また、透谷には「蝶のゆくへ」「眠れる蝶」「双蝶のわかれ」を代表とする優れた短い抒情詩があり、それらが藤村の『若菜集』を直接に導き出すこ

とになった<sup>19</sup>。

1897(明治30)年4月、民友社より詩集『抒情詩』が出版された。国木田独步、松岡(柳田)国男、田山花袋、太田玉茗、嵯峨の屋御室、宮崎湖処子の六人の詩業である。しかし、「詩を抒情主体そのものの表出にまで深めた透谷抒情詩の魅力は、『抒情詩』一卷には十分浸透しなかった」<sup>20</sup>。その四ヶ月後に出た『若菜集』によって日本近代詩はようやく一つの達成を見せられた。官能の解放、恋愛の賛美、自然への憧憬、流離の旅情、芸術への賛歌など、その主題は極めて多彩である。詩人藤村は内心の要求を、また自己の欲求を率直に、解放に向けて情熱的に打ち出した。この詩集の影響力は大きかった。彼はのちにその「藤村詩集序」(1904年)の中で、「遂に、新しき詩歌の時は来たりぬ。」と述べた。これは自身の詩集が、とりわけ若者に精神の大変革をもたらしたことを知ることであり、確実に新時代を出現させたことを証明するに足ることばでもあった<sup>21</sup>。

1897(明治30)年前後、日清戦争(1894・95年)の勝利を契機として、資本主義路線のもと、社会は近代的な装いをほぼ確立し、国勢は大いに高揚していた。思想的には、自由主義を中心とする近代西欧思想が広がりつつあったが、伝統を重視する国粹主義が重視され、社会全体として、封建的倫理がまだ強い影響力を持っている時代だった。『若菜集』は、封建的倫理や儒教的モラル、また古い伝統や因襲に対して、それ等を突き破り、のりこえる形で内的な感情が強烈に表出されたものである。特にその中の恋愛詩は当時では大きな社会的意味を持っていた。この点に関して、伊藤信吉は次のように述べている。

江戸時代の旧道徳において恋愛は罪悪視されていた。これに対して藤村の詩は、恋愛を生命の燃焼、人間性の本然の発現というふうにとり、そこから旧道徳からの解放、精神と肉体の解放、古い生活慣習からの解放、という新時代のモラルを提出した。総じてこれは、人間性の自覚、自我の自覚につながる事柄であり、それによって近代の精神の詩的形象化が行われたのである。<sup>22</sup>

「初恋」を含む『若菜集』の恋愛詩が持っていた時代的、積極的意味を正しく指摘した評価といえよう。

## 二、中学・高校国語教科書における「初恋」の採録状況

「初恋」がはじめて教科書に登場したのは筑摩書房の高校の『国語一』(1959年)である。その後、しばらくして筑摩からは消えていったが、1975(昭和50)年に再び東京書籍の高校国語教科書に、そして1978(昭和53)年には中学の国語教科書に採録されるようになった。高校教科書での採録は『新版 高校現代文』(日本書籍、1996年)が最後であるが、中学教科書では、「初恋」は80年代から定番化していき、今は盤石になっている。表1と表2<sup>23</sup>は「初恋」を採録した教科書名、発行社及びその使用年度を一覧にしたものである<sup>24</sup>。

表1からわかるように、高校では「初恋」はほとんど70年代と80年代の教科書に採録されていた。70年代の教科書では、「初恋」は採録回数が一番多い「小諸なる古城のほわり」の6回に次いで5回であった<sup>25</sup>。80年代の教科書では「初恋」は8回採録されたが、「小諸なる古城のほわり」の28回とは比較にならなかった<sup>26</sup>。90年代以降<sup>27</sup>、「初恋」は日本書籍の教科書での採録(1回)を除いて、高校教科書に使われなくなった。また、高校教科書において、この詩は主に高校二年または三年の教材として使用されていた。「初恋」が高校教科書から消えた理由としては、「小諸なる古城のほわり」の定番化が進んだことの影響や<sup>28</sup>、中高で同じ教材を学習することを避けるためなどが考えられるが、もちろん、この詩そのものの特徴によるところも大きいだろう。あくまで推測だが、年々恋愛に関する情報が増えていく時代にあって、少年少女の初々しい恋愛感情が歌われたこの詩はもはや高校生向けではなく、多感な青春前期を生きる中学生のほうが共感を呼びやすいと判断されたのではないか。例えば1990年刊の三省堂の中学国語の指導書に、この詩の採録理由として「うたわれているみずみずしい詩心は、生徒たちの胸に直接的に働きかけるであろう」<sup>29</sup>と記されていることなどもその傍証となるだろう。

表2からわかるように、中学では「初恋」は『新版 中学国語3』(教育出版、1978年)及び『中学校国語三』

表1 「初恋」を採録した高校国語教科書

番号	教科書名	発行者	使用年度
1	国語一	筑摩書房	1959～62
2	現代国語三	東京書籍	1975～77
3	新訂 現代国語三	東京書籍	1978～80
4	高等学校現代国語三	尚学図書	1978～80
5	高等学校現代国語三 新訂版	尚学図書	1981～84
6	改訂 現代国語三	東京書籍	1981～84
7	高等学校国語二	尚学図書	1983～85
8	現代文	光村図書	1983～85
9	基本国語2	明治書院	1983～85
10	現代文 改訂版	光村図書	1986～93
11	高等学校国語二 新訂版	尚学図書	1986～91
12	改訂 現代文	東京書籍	1987～89
13	新編 現代文	明治書院	1987～89
14	国語二 新版	尚学図書	1992～94
15	新版 高校現代文	日本書籍	1996～02

表2 「初恋」を採録した中学国語教科書

番号	教科書名	発行者	使用年度
1	新版 中学国語3	教育出版	1978～80
2	中学校国語三	学校図書	1978～80
3	中学国語3	教育出版	1981～83
4	中学校国語三	学校図書	1981～83
5	改訂 中学国語3	教育出版	1984～86
6	新訂 中学国語3	教育出版	1987～89
7	国語3	光村図書	1987～89
8	新版 中学国語3	教育出版	1990～92
9	国語3	光村図書	1990～92
10	現代の国語 新訂版3	三省堂	1990～92
11	中学校国語3	学校図書	1993～96
12	現代の国語3	三省堂	1993～96
13	中学校国語3	学校図書	1997～01
14	現代の国語3	三省堂	1997～01
15	現代の国語3	三省堂	2002～05
16	伝え合う言葉 中学国語3	教育出版	2006～11
17	現代の国語3	三省堂	2006～11
18	伝え合う言葉 中学国語3	教育出版	2012～15
19	新しい国語3	東京書籍	2012～15
20	中学生の国語 三年	三省堂	2012～15
21	中学国語3	教育出版	2016～20
22	新編 新しい国語3	東京書籍	2016～20
23	国語3	光村図書	2016～20
24	現代の国語3	三省堂	2016～20
25	新しい国語3	東京書籍	2021～
26	国語3	光村図書	2021～
27	現代の国語3	三省堂	2021～
28	伝え合う言葉 中学国語3	教育出版	2021～

(学校図書、1978年)に登場して以来、教科書に採録されつづけてきた。80年代から、採録回数が増加し、定番化していく<sup>30</sup>。採録数だけを見れば、その回数は必ずしも多いとは言えないが、中学の国語教科書発行会社の数が80年代からほぼ5社<sup>31</sup>に維持されていたことを考えると、「初恋」は約五分の二あるいはそれ

以上の中学三年の国語教科書に使われてきたということになる。そして、2021年度使用開始の中学三年生用の全ての国語教科書にこの詩が登場している<sup>32</sup>。中学では三年以外では一度も採録されていないというのもこの詩の特徴だろう。

前述したようにこの詩には初出版と改訂版と二つの形があるが、中学・高校教科書は皆初出形をとっている。これまでの教科書にもつばら初出形が採録されてきたのは、1970年代以降、原典尊重主義的思考が強まっていったことにもよるが、初出形の価値が十分に認められていることもその大きな理由であろう。

### 三、「初恋」が1970年代半ば頃再び注目された理由

既に述べたように、「初恋」は1950年代に一度教材化されたが、中学・高校の国語教科書に多く使われるのは1970年代の半ば以降である。ここで問題になるのは、なぜこの詩が70年代半ば頃再び注目されるようになったのかということである。『新版 中学国語3』(教育出版、1978年)の指導書では、この詩が選ばれた理由の一つとして、「現代の退廃的な傾向にある恋愛観にあふれる中であって、このような純愛的な主題を持つ詩に接することは意味あることである。」と述べられている。また、『中学校国語3』(学校図書、1978年)の指導書の中に、「セックスものの氾濫している現代と異なり、男女間のきびしい当時においては、美しい乙女に対するほのかな恋心をうたいあげた「初恋」に、紅顔可憐の少年や純情可憐な少女達が拍手喝采していたのであろう。」というような記述がある。学校図書のほうは明治の社会規範下で「初恋」が受容された理由について述べたものであるが、指導書内の説明とはいえ、どちらも「現代」への関心を窺わせていて大変興味深い。おそらく「初恋」を教材化するとなると、たいていの教科書編集者がこれらの指導書の執筆者たちと同様な思いを抱くのではないかと思うが、その背景になっている戦後、とりわけ60年代から80年代にかけての恋愛に関する社会意識の変化を見落としてはならない。では、当時どのような変化が起きていたのだろうか。

「恋愛」が元々内在させている精神性と肉体性に関して、江戸時代までは肉体性の側面が強調されていたが、

近代社会になると肉体性が蔑ろにされ、精神性が強調されるようになった。「明治期に西洋キリスト教社会の婚姻制度が導入される過程で、若者たちの性的関係に対して、比較的寛容だった伝統が打破され、禁欲的な性的タブーが確立し、特に女性に対しては処女性が強く要求されるに至った。」<sup>33</sup>もちろん、近代に入って、性欲の価値上昇を図る言説がないわけではない。大正期以降、性欲と恋愛の関係が盛んに論じられ、霊的要素である恋愛と、肉体的要素である性欲との一致統合が主張される「霊肉一致」の思想が現れた<sup>34</sup>。しかし、〈恋愛至上主義〉においても〈通俗性欲学〉においても、「霊肉一致」という落としどころが共有されるようになっていったものの、「霊肉一致」を担うべき存在が、恋愛によって結ばれた夫婦に限定され、「婚前の男女、特に女性に対しては純潔と処女性が強調され、婚前の男女が性欲を発動させることは、「自由恋愛」を主張したといわれる〈恋愛至上主義〉においてすら、一般的に認められたわけではなかった」<sup>35</sup>。

戦後、特に1960年代半ば以降、大きな変化が見られるようになった。井上輝子は、「日本人の意識—NHK世論調査」第一回の調査結果を分析する中で次のように述べている。

戦後、特に1960年代半ば以降、『性の解放』が喧伝され、『婚前交渉』や『同棲』がマスコミで取沙汰されるに至り、日本人の性意識は再度変化しつつあることが予測される。(『日本人の意識—NHK世論調査』至誠堂、1975年2月、135頁)

実際、60年代はじめの頃から「婚前性交」はマスメディアのトピックとして取り上げられ、大きな潮流になっていた<sup>36</sup>。例えば、『婦人公論』では1962(昭和37)年の新年号から婚前性交がトピックとなって「純潔」論争が行われていた。

そして、70年代に入ると、若者の性はさらなる話題を呼ぶようになった。『毎日新聞』が1970(昭和45)年の紙面で「青年＝若ものたちの性」というテーマで特集記事を連載する一方、「青少年：わが家の性教育」と題して識者に子どもに対する性教育の実例を語ってもらっている<sup>37</sup>。さらに、青少年の性の問題は、国

会でも取り上げられた<sup>38</sup>。そのような社会状況の中にあっては、教科書編集委員たちも、当然若者の性の問題に目を向けないわけがないであろう。そして、「健康」な恋愛のモデルを中高生に示そうとして、純粋な恋愛の感情を謳い上げた藤村の「初恋」が再び注目されたのではないか。ただし、ここで指摘しなければならないのは、上記の指導書に述べられた「現代の退廃的傾向」というのは、60年代から現れ始める性意識の変化を女性解放、人間解放と考えず、フェミニズムを忌避する思考の表れでもあるということである。だとすれば、そうした見方は、他方でまだ封建的人間観・女性観を根強く内包していたとっていいかもしれない。

#### 四、「初恋」の扱われ方と教材的価値

繰り返しになるが、「初恋」は中学では『新版 中学国語3』(教育出版、1978年)及び『中学校国語三』(学校図書、1978年)に登場して以来、教科書に採録されつづけてきた。そして2021年度使用開始の全ての中学三年生の国語教科書に採録されている。では、この詩の教材としての価値はどこにあるのだろうか。本章では、教科書の指導書の中でこの教材がどのように扱われてきたかを具体的に考察し、その教材的価値について検討してみたいと考える。既述したように、この教材は70年代及び80年代の高校教科書にも採録されていたが、90年代以降高校教科書からほとんど消えていったため、ここでは主に中学教科書とその指導書进行分析してみたいと思う<sup>39</sup>。

まずはこれまでこの詩を一番多く採録して来た教育出版の教科書を見てみよう<sup>40</sup>。『新版 中学国語3』(教育出版、1978年)で、「初恋」はガルシーア＝ロルカの詩「七人の乙女の歌」(小海英二訳)、山川方夫の「夏の葬列」と一緒に「表現の魅力」という單元の中に置かれている。そしてこの詩の「学習の手引き」に課題として、詩のリズムに注意しながら声に出して読むこと、各連ごとにそこでうたわれている内容を短くまとめること、及びこの詩からどんな感じを受けるか、またその感じはどのような表現から来るのかについて話し合うことの三つがあげられる。同教科書の指導書では、この詩が選ばれた理由として、三年生にとって

文語詩に接する機会が必要であることと、先に紹介した「現代の退廃的な傾向にある恋愛観にあふれる中にあって、このような純愛的な主題を持つ詩に接することは意味あることである」ことが記されている。そして、取り扱い方では、文語定型詩の持つ韻律の美しさと、詩の心・叙情がみごとに調和しているこの詩を生徒に繰り返し読み味わせ、詩のよさを感じさせる、とあるほか、生徒らを取り巻いている刹那的・享樂的な「愛」の姿とは違った愛の抒情を生徒たちに感じさせるとも付け加えられている。また、「この詩が生み出された当時の、恋愛を罪悪視するような、精神的に抑圧された状況の中で、若者たちが、人間的な解放を必死に求めていた明治初期の時代に、この「初恋」を含む『若菜集』などが果たした画期的な役割を知ることにより、詩が単なる手すさびではなく、人間解放についての大きな役割を持つことを理解させる」と書かれ、「教材の研究」の項目では、『若菜集』の文学史的な位置づけを示し、「初恋」の持つ意味の大きさが強調されている。

三年後の『中学国語3』（教育出版、1981年）では、この詩は木下順二の「夕鶴」と単元「文学の精神」の中に配置された。教科書指導書では、この教材の選ばれた理由として、生徒たちの共感を呼ぶことのできる詩を学習して、みずみずしい感情にふれ、感動を深めさせることと、文語定型詩の特徴をとらえさせることが挙げられている。他方、前記の指導書にあった「現代の退廃的な傾向」についての言及がなくなった。それはこの教科書が新しい学習指導要領（1977年告示）に基づいて編纂されたものであることにもよるのだと思うが、それに加えて、そのような考え方が既に時代遅れになりつつあったからではないか。また、同指導書の「教材の研究」の項目では、前記指導書とほぼ同じ内容が書かれているが、「教材の扱い方」の部分では変化が見られる。『若菜集』が果たした画期的な役割についての強調の度合いが減じ、「『若菜集』などの、文学史上に果たした役割についてもふれた方が、詩の理解に役立つもの」と記されるのにとどまっているのだ。

『新訂 中学国語3』（教育出版、1987年）の指導書では、この教材の選ばれた理由と取り扱い方についての記述は前記の指導書とあまり変わらないが、1978年と81年使用開始の教科書の指導書の「教材の研究」の

項目に詳しく記された『若菜集』の文学史的な位置づけは姿を消した。そのかわりに、同指導書では「教材価値」の項目で、「恋愛」というものが罪悪視されていたほどの時代にあつて、恋の喜びをおおらかに歌い上げたところに、作者の新時代への期待が表れている」と記された。また、この詩の教材的価値として、他に三つ挙げられた。一つ目は七五調の文語定型の流麗なリズムについてで、二つ目は四つの連からなる構成や同語の反復など表現の妙についてであり、三つ目で「ちょうど思春期に入った中学生に、昔も今も変わらぬ恋愛の一つの姿として投げかけ、人間の愛について考えさせるきっかけとしたい」ということが述べられている。

「初恋」は『新版 中学国語3』（教育出版、1990年）に使用された後、しばらく教育出版の教科書に登場しなくなったが、『伝え合う言葉 中学国語3』（教育出版、2006年）にまた採録されるようになった。そして、それ以来同社の教科書に使われ続けている。『伝え合う言葉 中学国語3』（教育出版、2006年）で、この詩は「第一部 基本」に次ぐ「第二部 補充と発展」の中に配置されている。文語表現の難しさを考慮した構成といえよう。教科書の指導書では、この教材の価値として、文語表現の美しいリズム感と純真な初恋の思いを味わうことができる、と述べられている。『新訂 中学国語3』（教育出版、1987年）の指導書に記された「ちょうど思春期に入った中学生に、昔も今も変わらぬ恋愛の一つの姿として投げかけ、人間の愛について考えさせるきっかけとしたい」という内容は見られなくなった。また、同指導書では、この教材の特色として二点取り上げられている。一点目は「初恋」の文学史上の位置づけについてで、二点目は初恋の主題を文語定型詩で表現していることである。90年代までの同発行社の指導書の「教材の扱い方」の項目に記されていた、『若菜集』が文学史上に果たした役割についてふれるという記述はなくなったものが、執筆者はまだ文学史に拘っているようだ。

それと、同指導書にはもう一つ注意すべきところがある。この詩の朗読について、「詩の中の情景と、情景にこめられた心情を、表現に即して読み取らせるようにしたい。そして、文語定型という詩の特質を生かし

て音読・暗唱へと発展させたい」という記述が加えられていることだ。表現としての朗読が重視されているのである。これまで見てきた指導書の中でも朗読は重視されていたが、しかしそれは主に読解のための朗読であった。この違いの原因としては、まずは1998(平成10)年版中学校学習指導要領の存在が考えられる。

この指導要領から、国語の領域は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「言語事項」の3領域1事項で構成するように改められた。そして、「読むこと」の配慮事項の中に、「目的や必要に応じて音読や朗読をすること」という内容が加えられ、同指導要領解説に朗読に対する考えが次のように記述されている。

音読や朗読は、生徒が自分の音読や朗読の声を聞くことによって理解を一層深めたり理解の成果を確かめたりできるとともに、声を他者に聞かせることにより、読むという活動を通して生成された理解の成果を共有することができる。リズムや言葉の響きの特徴をつかむための音読や理解の成果を表現するための朗読は、特に「C読むこと」の第2学年及び第3学年の指導事項ウと関連している言語活動例である。

この学習指導要領が発表された翌々年(1999年版高校学習指導要領が発表された翌年)というタイミングで、『身体感覚を取り戻す一腰・ハラ文化の再生』(斎藤孝、日本放送出版協会、2000年)、『声に出して読みたい日本語』(斎藤孝、草思社、2001年)といった本がベストセラーとなって、声・身体・日本文化という布置が形成された<sup>41</sup>。その後、文化審議会答申も「これからの時代に求められる国語力について」(2004年2月)の中で、「古典の音読や暗唱を重視し、日本の伝統的な文化に親しむこと」を「読む力」として取り上げ、「国語科教育の在り方」で、「音読・暗唱と古典の重視」が方向づけられた。2000(平成12)年以降、「初恋」を採録した中学校の国語教科書が増加していったことは、おそらくこのような動向と無関係では無いはずだ。そして、「初恋」の音読を楽しむ教材として位置付ける教科書も現れた。例えば、東京書籍発行の『新しい国語

3』(2012年)、『新編 新しい国語3』(2016年)及び『新しい国語3』(2021年)等では、「初恋」が主教材としてではなく、コラム「日本のしらべ」の中に取り上げられている。

続いて、教育出版と同じく1978年から「初恋」を使用し始めた学校図書の教科書を分析する。『中学校国語三』(学校図書、1978年)の指導書では、「教材観」の項目でこの教材の価値として、初々しい初恋の情緒が歌い上げられたこと、そして詩情が七五調で表現されたことが挙げられた。同指導書のこの詩の「鑑賞」の部分ではその文学史上の位置づけについて言及されていないが、「指導の展開」の部分では、学習活動の一つとして、当時の社会や時代と関連して、この詩が愛唱された理由を考え、話し合うということが記述される。「初恋」の当時の社会で果たした役割が意識されていたことがわかる。

『中学校国語三』(学校図書、1981年)では、「初恋」は単元の教材としてではなく、「序詩」として教科書の最初に置かれた。それが選ばれた理由として、詩の内容が中学三年生にとって実感として読み取れるものであること、明治時代の人間性解放を目指す「ロマン主義」の運動に関わっていること、そして文語定型詩であることの三つが述べられた。「初恋」の果たした役割への言及が簡単とは言え、まだ残されている。しかし、『中学校国語3』(学校図書、1993年)の指導書では、「初恋」の文学史上の位置づけについての言及がなくなり、「指導の展開」の部分でも『中学校国語三』(学校図書、1978年)の指導書にあるような学習活動は見当たらなくなった。

『中学校国語3』(学校図書、1997年)の指導書は前記の教科書『中学校国語3』(学校図書、1993年)の指導書の内容と大体同じであるが、「読解のポイント」が付け加えられた。その中に二つのポイントが記されていて、一つは「人を愛することの美しさ、喜びを感じ取らせ、平和な人間社会の基盤である愛のあり方を考えさせる」ことであり、もう一つは「伝統的な文語定型詩のリズムを味わう」ことである。そして、一つ目のポイントについての説明の中に、次のような内容が記述されている。

昨今の若者たちの間では、大人たちの商業主義的恋愛の影響により、恋愛が人間性を無視した、セックス中心の、ゲーム感覚的、または商業主義的なものになり、真に人を愛することの美しさ、その喜びがわからなくなっている若者が増えており、人間性が著しく疎外されている。そういう現代において、初恋の普遍的な情感を感じ取らせ、人間らしさを失わず、性に対する歪んだ社会の中で、人間的な自然な愛とは何か、それを実現し、生きてゆくのかを考えさせたい。<sup>42</sup>

恋愛の精神性を軽視（無視）して肉体性ばかり重視する若者の増加を危惧し、恋愛が本来持つべき精神性と肉体性とを肯定し高らかにうたい上げた「初恋」をもって、生徒等に「正しい」恋愛観を育ませようとする執筆者の意図が窺われるだろう。

三省堂は「初恋」を、教育出版の採録数に次ぐ、8回掲載してきた。同社発行の教科書の指導書で、教材選定のねらいとして取り上げられているのは、初恋の叙情は生徒にも時代を超えて共感されること及び詩情が文語定型詩で表現されていることの二つである。また、「初恋」の近代文学史上に果たした役割については、一度も言及されていない。

光村図書は2021年使用開始の教科書を含めてこれまで「初恋」を4回教材化してきた。同社発行の教科書の指導書では教材提出の意図として、この詩の叙情が時代を超えて人の心を打つこと、及び七五調の定型詩として朗読や暗唱に最も適した教材でもあることが述べられている。この詩の文学史上に果たした役割について1987年使用開始の教科書の指導書と1990年及び2016年使用開始の教科書の指導書では言及されていない。ただし、2016年使用開始の教科書の指導書では、「学習活動」の中に、「島崎藤村や作品の書かれた時代について簡単に触れるとよい」と記述されているが、その具体的な説明はない。「初恋」の文学史上の位置づけはあまり重視されていないといえよう。同じことは東京書籍の教科書の指導書にもいえる。同社はこれまで「初恋」を3回採録してきたが、その教科書の指導書でも文学史については特に触れられていない。

これまでの考察から「初恋」を学習させる意義をい

くつかまとめることができるが、この詩が採録され続けた中で、その教材的価値が時代状況により大きな変化が見られる。文語定型詩の美しいリズム感を味わわせることができることは、この詩の教材的価値として一貫して重視されてきたといえる。ただし、2000年までの教科書の指導書では、音読・朗読は読解のための手段として強調されたのに対して、それ以降表現のための音読・朗読が強調されるようになり、この詩を音読を楽しむ教材と位置づけられる教科書さえ現れた。

また、この詩にうたわれた初恋の感情を味わわせることはこの詩の教材的価値の重要な一つである。「初恋」を学び、恋愛について考えさせることはこの詩が70年代半ば頃再び注目された大きな理由だと考えられる。場合によってはセックスよりも恋愛の方が難易度が高いともいえなくもない時代では、この教材的価値がいつそう重要になるだろう。石井正己は国語教科書の中に友情の重視と恋愛の軽視という教材の非対称性があることを指摘し、「国語科の授業ではそんなことに関わりたくない、という気持ちもあるにちがいない。だが、その結果、子供たちは恋愛を学ばないままに大人になってしまうのではないか。」<sup>43</sup>と述べている。国語教科書の中で「恋愛」をテーマとする貴重な教材である「初恋」を習わせる意味がいつそう大きくなるのではないかと思う。

最後に、この詩が日本近代の代表的抒情詩であることが採録の大きな理由の一つだと考えられるが、その文学史的価値の内実については時代によって変化が見られる。『新版 中学国語3』（教育出版、1978年）と『中学校国語三』（学校図書、1978年）の指導書では、「個」の解放について「初恋」の持つ大きな役割が強調されていたが、その後の教科書の指導書では強調の度合いが薄くなっていくか、あるいは言及しないかが変わる。しかし、2000（平成12）年以降、伝統的な言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることが一層重視されるようになり、「初恋」は近代詩の中の古典として継承にふさわしい作品だと広く認識されるようになっていったといえよう。

#### おわりに

「初恋」は高校教科書『国語一』（筑摩書房、1959年）

に登場して以来、すでに60余年過ぎている。この教材はその後、しばらく教科書から消えていったが、1975(昭和50)年から再び高校国語教科書に、そして1978(昭和53)年から中学国語教科書に採録されるようになった。高校教科書での採録は『新版 高校現代文』(日本書籍、1996年)が最後であるが、中学教科書では、80年代から定番化していき、今は盤石になっている。

この詩の教材的価値について本論文では主に中学の国語教科書とその指導書を考察し検討してみた。文語定型詩の美しいリズム感を味わわせること、この詩にうたわれた初恋の感情を味わわせ、恋愛について考えさせること、及びこの詩の文学史的価値の三つが「初恋」の持つ教材的価値だとまとめられるが、この詩が採録され続けた中で、時代状況によってその価値に大きな変化が見られた。

なお、本論文では「初恋」の教材的価値を論じてきたが、まだ現代の子供たちがこの詩をどう受け取り、どのような授業をしたらより実りのあるものになるのかについての分析が残されている。今後の課題としたい。

## 注

- 1 戦前の中等学校読本における藤村作品の採録状況について、橋本暢夫「島崎藤村作品の教材化の状況とその史的役割」(『中等学校国語科教材史研究』溪水社、2002年7月)に詳しい分析がある。橋本によると、旧制中等学校の読本中、藤村の作品を採録した教科書は、ほぼ328種、1084冊である(訂正本、改訂本も一種として数えている)という。
- 2 新制中学・高校は戦後の学制改革でできたものである。旧制中学が修業年限5年(第二次世界大戦末期は4年)で、新制中学一年が旧制中学一年に、新制高校一年が旧制中学四年に相当する。
- 3 戦後の国語教科書における藤村作品の教材化の状況について、拙稿「島崎藤村「夜明け前」の教材的価値―戦後の国語教科書における藤村作品の教材化の状況と関連させて―」(『学校教育学研究論集』42号、2020年10月)に具体的な分析がある。
- 4 ここでいう「50年代」は戦後、教科書検定制が復活してから、第3期の学習指導要領が適用され始める(中学は1962年、高校は1963年)までの期間を指す。
- 5 ここでいう「60年代以降」は、戦後第3期の学習指導要領(中学は1958年、高校は1960年告示)が適用され始める以降のことを指す。なお、以下使う「70年代の教科書」や「80年代の教科書」などは、戦後第4期(中学は1969年、高校は1970年告示)、第5期(中学は1977年、高校は1978年)の学習指導要領が適用される期間に使われる教科書のことを指す。
- 6 60年代以降の中学・高校の国語教科書に藤村作品、特に「夜明け前」以外の小説教材や散文教材が減少していった理由について、前掲拙稿の中に詳しい分析がある。
- 7 もともと別々に発表された「小諸なる古城のほとり」と「千曲川旅情のうた」は、『藤村詩抄』(1927年)に収録時、「千曲川旅情の歌」の「一」と「二」になった。80年代までの高校教科書では、二編が共に採録される場合がほとんどだったが、80年代以降はほとんどの場合、「小諸なる古城のほとり」だけが採録されるようになった。
- 8 島村輝「ことばのかたち・ことばのおもい―藤村詩の言葉を読み直す」(『島崎藤村研究』34号、2006年9月)
- 9 吉田精一『藤村名詩鑑賞』(角川書店、1961年6月)。引用は『吉田精一著作集』第六卷(桜楓社、1981年7月、190～191頁)による。
- 10 関良一「初恋」の注釈による。(『日本近代文学大系15 藤村詩集』角川書店、1971年12月)147頁。
- 11 三好行雄「藤村詩鑑賞」(『近代の抒情』塙書房、1990年9月)277頁。
- 12 注9に同じ、190頁。
- 13 例えば、木下尚江は「福沢諭吉と北村透谷」(『明治文学研究』第一巻第一号、1934年1月。引用は小田切秀雄編『明治文学全集29 北村透谷集』筑摩書房〈1976年〉による)で、「この一句はまさに大砲をぶちこまれた様なものであつた。この様に真剣に恋愛に打ち込んだ言葉は我国最初のものと思ふ。これまで恋愛や男女の間のことはなにか汚いものの様に思はれてゐた。それをこれほど喝破し去つたものはな

- かつた」と述べている。
- 14 黒古一夫「透谷における〈恋愛〉の位相」(『北村透谷論』冬樹社、1979年) 208頁。
- 15 注14に同じ、208頁。
- 16 関良一「鳥崎藤村『初恋』・『千曲川旅情の歌』」(大河原忠蔵ら編『国語教材研究講座 高等学校『現代国語』』第2巻、有精堂、1967年9月) 2頁。
- 17 藤村の自伝的色彩の強い長編小説『春』(1908年)の冒頭部分にこの訳詩集が透谷や藤村らに与えた影響について触れた場面がある。
- 18 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第一巻(講談社、1977年11月)、「北村透谷」の項を参照、小田切秀雄執筆。
- 19 三浦仁「北村透谷」(『詩の継承』おうふう、1998年11月)に詳しい分析がある。
- 20 注19に同じ、163～164頁。
- 21 澤正宏「第二章の概説」(澤正宏、和田博文編『日本の詩 近代篇』和泉書院、2000年3月) 29頁。
- 22 伊藤信吉「解説」(『藤村詩集』新潮社、1968年2月初版) 232頁。
- 23 表2の4番の『中学校国語三』(学校図書、1981年)の中で、「初恋」は単元の教材としてではなく、扉に置かれた「序詩」として採録された。
- 24 表1と表2のデータは主に『教科書掲載作品 小・中学校編』(日外アソシエーツ、2008年12月)と『教科書掲載作品13000』(同、2008年4月)を参考にし、2006年以降のデータは論者自身が実際の教科書を調査して得たものである。また、各教科書の使用年度は教科書研究センター附属の教科書図書館の教科書目録情報データベースを利用して得たものである。
- 25 70年代(1973～82)の「現代国語」の教科書は14社より39種(「現代国語」の1～3を一種と数える)発行された。
- 26 80年代(1983～92)では、70年代に比べ、同じ学年の教科書でも異なる種類のものを出す教科書発行社が多くなり、「国語I」「国語II」は13社よりそれぞれ36種発行され、「現代文」は13社より60種発行された。
- 27 ここで言う「90年代以降」は「高等学校学習指導要領」(1989年告示)が適用され始める1994年以降の意味で使う。
- 28 1994年～2006年までの高校国語教科書に使われた藤村詩の採録状況は次の通りである。「小諸なる古城のほitori」(23回)、「椰子の実」(3回)、「逃げ水」(3回)、「潮音」(1回)、「初恋」(1回)。なお、ここで使うデータは、『教科書掲載作品 13000』(日外アソシエーツ、2008年4月)を参考にしてまとめたものである。
- 29 『現代の国語 新訂版3』(三省堂、1990年)の指導書による。
- 30 80年代の中学国語教科書では、藤村詩が3編使用されていた。「初恋」は8回、「小諸なる古城のほitori」は3回、そして「椰子の実」は1回であった。
- 31 70年代以降の中学国語教科書の発行社及び各年度使用された教科書の点数の推移を示すと以下になる。1972～80年は6社18点、1981～2011年は5社15点、2012～15年は5社18点(三省堂は各学年に2点を発行)、2016～20年は5社15点、2021以降は4社12点である。
- 32 2000年以降「初恋」を採録していなかった学校図書は、2021年度使用開始の中学国語教科書を発行せず、残りの4社は各学年にそれぞれ1点発行している。
- 33 『日本人の意識—NHK 世論調査』(至誠堂、1975年2月) 135頁。
- 34 赤川学「恋愛という文化/性欲という文化」(服藤早苗等編『恋愛と性愛』早稲田大学出版部、2002年11月)を参照。
- 35 注34に同じ。
- 36 川村邦光『オトメの行方』(紀伊國屋書店、2003年12月) 271頁。
- 37 日本性教育協会編『「若者の性」白書—第8回 青少年の性行動全国調査報告』(小学館、2019年8月) 10頁。
- 38 日本性教育協会編『「若者の性」白書—第8回 青少年の性行動全国調査報告』(小学館、2019年8月)。同書によると、「1971年の参議院本会議では、文部大臣が「性の乱れ」が現代青年の問題と答弁している。また、同年の参議院予算委員会では若者の「性の乱れ」を文部大臣に、性病予防対策費の減額につ

いて厚生大臣に、職場での性教育について労働大臣に質問している。」という。

- 39 2021年使用開始の教科書の指導書はまだ出版されていないため、それについての分析はここで省略する。
- 40 「初恋」の指導に関しては、1984年使用開始の教科書の指導書は1981年のそれと内容が大体同じである。1990年使用開始の教科書の指導書は1987年のそれと内容が大体同じである。2012年及び2016年のは2006年のそれと大体同じである。そのため、こ

こでは1984年、1990年、2012年及び2016年使用開始の教科書の指導書についての分析を省略する。

- 41 佐藤泉『国語教科書の戦後史』（勁草書房、2006年5月）200頁。
- 42 『中学校国語3』（学校図書、1997年）の指導書による。
- 43 石井正己「後書き一定番教材を脱構築するために」（石井正己編『国語教科書の定番教材を検討する』三弥井書店、2021年1月）。